

オリゲネスの祈祷理解

— 罪人の祈り その内的態度をめぐって —

梶原 直美

序

オリゲネスは彼の著作『祈りについて』のなかで、「単に祈るだけでなく、神にふさわしく祈るべき」と述べ、ふさわしく祈ることの重要性についてしばしば言及している。しかし一方で、そのように理解しながらも祈れない現実からこそ、人間は戸惑い、苦悩する。

オリゲネスの論理には、理想のみを掲げ、実践を無視した内容を懸念する必要はない。有賀鐵太郎がクレメンスとの比較のなかで、オリゲネスの祈祷論に、「理想と現実の動的な緊張」という性質を指摘し、そこに、理論的な反省と実践としての祈りの奨励がなされていると述べているように⁽¹⁾、オリゲネス自身、祈りをもって生きた人であったと評される。彼の祈祷観は、ギリシャ哲学の思想を素地に有しながらもキリスト論的であり、また、祈るなかで三位それぞれとの関わりが不可欠なものとして理解されている。その祈祷観の根底には、幼少時より熱心なキリスト教信仰者の家庭に育ち、実際に祈られ、また祈った事実が存在するのであり、同時に、豊かな教育によってもたらされた神学的素養があったのである。

オリゲネスはそのような素地に基づいて祈祷論を展開している。

しかし、多くの、罪を持つ不完全な人間は、彼の述べるような「神にふさわしい祈り」をささげ得るのであろうか。またそれはいかにして可能となるのであろうか。本稿は、その問いに対する一試論を提示するものである。

論述にあたっては、一次資料として、オリゲネスの著作『祈りについて』のほか、彼の神学が提示されている『諸原理について』、および、『ヨハネによる福音注解』等の注解書を用いる。

本論文において、オリゲネスの著作については以下の略記を用い、聖書の引用表記はMLAによる略記に従った。『祈りについて』：PE 『諸原理について』：PA 『ヨハネによる福音注解』：ComJn

(1) 有賀鐵太郎『オリゲネス研究』(有賀鐵太郎著集I)、創文社、1981年(長崎書店1943年の再版)、85頁、参照。

1. 罪人の祈り

ゲッセルは、『祈りについて』を論じた研究書において、オリゲネスが、正しい人の祈りのみが神にとって好ましい香りであり、受け入れられるものなのであって、正しくない人の祈りは無益なものと理解されていると述べている⁽²⁾。また、悪い考えで祈るなら祈りが罪へと変化すること⁽³⁾、そして『祈りについて』⁽⁴⁾5,5を根拠に、ユダの祈りはそのようにして罪となり、祈っている間、彼は罪を犯していたと理解されていることを指摘している⁽⁵⁾。

ここにおいてまず注目したいのは、祈ることが、その祈る主体のあり方を根拠として、罪を犯すことになると理解されていたのか、ということである。その祈りが益をもたらさないのであれば、その人は祈りによって神への方向性すら得ることはできないことになる。祈ることにおける可能性は何ら見出されない。その基準が何であるにせよ、「正しくない」という人間の属性に関するひとつの尺度によって、人は祈る可能性そのものを失ってしまうことになる。オリゲネスは果たしてこのように考えていたのか。

文脈のなかで考察すると、ゲッセルの指摘する箇所は、反証するための、祈祷無用論者たちの論理であると理解するのが適切であろう⁽⁶⁾。ゆえに、ゲッセルの指摘するように、オリゲネスによって、正しくない人の祈りが無益なものと理解されているとは言えない。

リーフェバーは、オリゲネスの説教における祈りと、『祈りについて』とに関して、両者の共通点に関する研究を提示している⁽⁷⁾。その結論部において、彼は、双方の類似点を指摘し、それは、人類に対する悪魔の計画が人間に及んでいるという考え、お

(2) Cf. W. Gessel, *Die Theologie des Gebetes, nach >De Oratione< von Origenes*, München/Paderborn/Wien, 1975, p. 136.

(3) SelJer44 (PG 13, 588 BC) に基づいて考察されている。Cf. *ibid.*, p. 136, n. 58.

(4) 底本として、P. Koetschau, hrsg., "PERI EUXHS", in: *Die griechischen christlichen Schriftsteller (GCS) Tomus III (Origenes Werke Tomus II)*, Leipzig, 1899, pp. 297-403. を用い、引用には GCS との略記を用い、巻数、頁数、行数を記載している。なお、邦訳には、小高毅訳『オリゲネス 祈りについて・殉教の勧め』（キリスト教古典叢書12）、創文社、1985年、45-157頁、を参照し、本文中に引用する邦訳もこれに従った。

(5) W. Gessel, *op.cit.*, p. 136.

(6) オリゲネスは、『祈りについて』を、祈祷無用論者たちを論駁し、祈祷の有用性を提示するために著した。オリゲネスは祈祷の意味や有用性を、しばしば反論者の見解を引用し、そのひとつひとつに反証を挙げながら論じる方法を取っている。ゲッセルは前掲書において PE5, 5 (GCS 3, 310, 27f.) に関して論じているが、この箇所には祈祷無用論者たちの見解が明らかに含まれている。つまり、オリゲネスはここで、正しくない人の祈りを否定することを意図していたのではなく、神が不変であり、計画のうちに人を予定されるのであれば、旧約聖書に予告されていたユダが祈ることには意味がないと考える祈祷無用論者たちに対して反証することを目的に、これを述べている。

(7) P. S. Lefebvre, *The Same View on Prayer in Origen's Sermons and his Treatise On Prayer*, in: *Origeniana Septima*, hrsg. von W. A. Bienert, Leuven, 1999, pp. 33-38.

よび、そこから逃れる道の存在を「ひとつ」であるとしてそれを示している点である。それは、祈りのなかで、「神が満ち溢れた恵みのなかで彼に彼を知らせるときのみ、それゆえに神を求める人間の思いが生じ、神に集中し、神との交わりを選ぶとき、上向きの道を発見する」という点である。つまり、ここに、神への方向性の可能性が見出されている。

彼は、説教におけるオリゲネスの祈りを論じるなかで、罪を犯すキリスト者は、祈るなかで神に転向すると述べている。その理由は、祈るなかで「神の栄光に圧倒される」からである。神のリアリティや罪の重さが捕えられ、祈るなかで浄化の力へと心を開き、罪の罰としての痛みを請う。そのとき、彼は罪の力からの解放を見出す。しかし痛みを感じないなら、それは神が背を向けたことを意味する⁽⁸⁾。そのとき罪への気付きは消え、再び悪に抵抗し得ない犠牲者となる。しかし、神の絶え間ない助けによって人間は罪から遠ざかり、その助けは、彼の努力への神からの報酬として与えられる。これによると、罪ある人の祈りもまた、拒絶されるのではなく、「努力」として神に受けいれられることになる。

しかしその前に、「知る」ことによって生じる、神への方向性の可能性に注目したい。知らされることによって、人間に変化がもたらされる。それは「思い」として、神に向かうものである。罪を犯すキリスト者もまた、祈るなかで神の栄光を知り、神へと向かう。

リーフェバーによれば、罪を犯すキリスト者は、祈るなかで神に転向するのであるが、その祈りの性質に関しては説明されていない。しかし、神と罪の重さを理性によって知り、祈りのなかで心を開き、痛みと直面する。痛みとの直面は、痛みの回避ないしは拒絶から自らを解き放つことであると言えよう。痛むことは、同時に罪の力からの解放をもたらす。そしてここに、神の助けが存在する。

罪ある人—それがキリスト教の理解する人間の姿であり、祈る主体である。この人間存在そのものを、オリゲネスはとくに罪との関連においてどのように理解していたのであろうか。ここで、祈りのなかで常にひとつの主体でありながら変化する人間という存在そのものに関するオリゲネスの理解を探ってみたい。

2. オリゲネスの人間理解—罪人として

まず、オリゲネスの『ヨハネによる福音注解』のなかで、それについて詳細に論じられている箇所注目したい。彼は人間を、元から神の子ではないと述べている⁽⁹⁾。

(8) Ibid., n 16.

(9) 「実際、断じて、元から神の子である人は一人としていない」。 (ComJn X X, 33 [290])

オリゲネスの祈禱理解 (梶原)

そしてさらに「罪を犯す者は悪魔からのものである」⁽¹⁰⁾と述べ、「罪を犯すことと罪を犯さないこととの中間はありませんので、[すべての人は] 罪を犯すか犯さないかのいずれかです。」⁽¹¹⁾と、二極的な論述を展開している。

また、『諸原理について』⁽¹²⁾のなかでは、善と悪について述べるさい、「……悪い本性を有しているのであれば、その人が、善に至らないとはいえ、善を欲し、善に向かって走るということがどうしてありうるのだろうか」⁽¹³⁾との問いを提示し、さらに、「善を欲したり善をめざして走ったりすることは、明らかに中間的なことではなく、善である」と断定している。つまり、そこへ到らずとも目指していることを、オリゲネスは中間的とは見なしていないことが明らかである。また、「中間的」ということは、善でもなくまた悪でもないという状態として理解されている。

これらの考えから導き出されるのは、オリゲネスが前述のように「[すべての人は] 罪を犯すか犯さないかのいずれかです」と述べる時、罪に焦点が当てられており、その完全な性質ではなくても罪への方向性を有することが、二極的な表現の片側である「罪を犯す」という性質としてみなされている、ということである。人間は罪への方向性を持つことにおいて「罪を犯す者」であり、それゆえ悪魔からのものであり、神の子ではないのである。その悪魔からのものである人間は、それゆえに「罪を犯す」。

3. 悪魔の子から神の子へ

3.1. 言理の到来によって

しかし、悪魔からのものであっても、人間は神の子となることができる。これらのことに関して、オリゲネスはパウロの言葉とヨハネによる福音書から、以下のように述べている。

……ヨハネが公同書簡で述べているように、「罪を犯す人は」明らかに「悪魔からの者です。悪魔は元から罪を犯しているからです(ヨハネ I 3, 8)」。そして、神から生まれた人のうちに留まっている神の種子が、ひとり子である言理にかたどって形造られた人にとって、罪を犯すことのできない原因となるように、同じ

(10) これに関しては、ほかの箇所においても引用がみられる。「罪人の一人ひとは、概して、悪魔の子です。すべて『罪を犯す者は悪魔から生まれた』からです。」(ComJn X X, 10 [78])

(11) ComJn X X, 13, 107.

(12) 底本としては、H. Görgemanns-H. Karpp, hrsg., *Origenes, Vier Bücher von den Prinzipien, Texte zur Forschung*, Darmschadt, 1976.(以後、Görgemanns-Karpp と略記し、ギリシャ語本文の残存する部分ではラテン語訳の該当部分を [] によって示す) を使用した。また、邦訳には、小高毅訳『諸原理について』(キリスト教古典叢書12)、創文社、1978年、を参照し、本文中に引用する邦訳もこれに従った。

(13) PA III, 1, 18 (Görgemanns-Karpp 532, 4-5 [532, 20-21]): “είτε ἐροῦσιν ὅτι καλὸν τὸ θέλειν τὰ καλὰ καὶ τὸ τρέχειν ἐπὶ τὰ καλὰ, πεισομέθα πῶς ἡ ἀπολλυμένη φύσις θέλει τὰ κρείττονα: [Quomodo ergo si is, ... malae naturae est, vult bona et currit ad bona, sed non invenit bona?]”

く罪を犯すすべての人のうちに悪魔の種子が内在しており、それが魂に附着している限り、それを有しているその人が正しい行為をなすことができないようにするのはです。しかし、「このため、即ち悪魔の業を滅ぼすために、神の子は現れた」のですから、わたしたちの魂のうちに神の言理が来られることで、悪魔の業が滅ぼされた時に、わたしたちのうちに植え付けられた悪い種子は根絶され、わたしたちは神の子どもらとなることができるのです。⁽¹⁴⁾

わたしたちの主イエス・キリストの到来によって「時は満ちる」こととなります。その時、望む者らは「子としての身分をいただきます」⁽¹⁵⁾。

このかたは、ご自分を受け入れた人々、その名を信じる人々には、神の子どもたちになる資格を与えた。⁽¹⁶⁾

さらには、パウロに関してさえも、「本性によって神の子ではありませんでした。後に神の子となった」⁽¹⁷⁾と述べている。人間には、とりわけ「罪を犯す者」には、悪魔の種子が内在し、それは人間から「正しい行為」の可能性を剥奪する。これが悪魔の業のひとつである。ここに人間は無力である。しかし、人間の魂のうちに「神の言理が来られる」ことによって悪魔の業は克服され、悪い種子は「根絶」される。

神は、魂が持ち得ない「言理」を人間に与えることによって、悪魔の業を滅ぼす。ゆえに、それは外側から魂に関わる。ただ、その言理をどのように受け取るかは人間による⁽¹⁸⁾。言理はそれ自身の力によって魂に侵入するのではない。ゆえに魂には、それを自らの内部に受け入れ、つまりそれを自らの一部とすることが必要である。魂がそれを内側に迎え入れることによって、言理は「魂のうちに」到来する。このとき、言理を内部へと受け入れる魂の選択は、自由意志によってなされる⁽¹⁹⁾。

(14) PE22, 4 (GCS 3, 349, 4-15): “πάτερ ἡμῶν ὁ ἐν τοῖς οὐρανοῖς,” δηλονότι “ὁ ποιῶν τὴν ἁμαρτίαν,” ὡς φησιν ἐν τῇ καθολικῇ ὁ Ἰωάννης “ἐκ τοῦ διαβόλου ἐστίν, ὅτι ἀπ’ ἀρχῆς ὁ διάβολος ἁμαρτάνει.” καὶ ὡσπερ “σπέρμα” τοῦ θεοῦ, ἐν τῷ γεγεννημένῳ “ἐκ τοῦ θεοῦ” μένον, αἴτιον τοῦ μὴ δύνασθαι “ἁμαρτάνειν” γίνεσθαι τῷ κατὰ τὸν μονογενῆ λόγον μεμορφωμένῳ οὕτως ἐν παντὶ τῷ ποιούντῳ “τὴν ἁμαρτίαν” “σπέρμα” τοῦ διαβόλου ἐνεστίν, ὅσον ἐνυπάρχει τῇ ψυχῇ, μὴ ἐὼν δύνασθαι κατορθοῦν τὸν ἔχοντα αὐτό. ἀλλ’ ἐπεὶ “εἰς τοῦτο ἐφανερώθη ὁ υἱὸς τοῦ θεοῦ, ἵνα λύσῃ τὰ ἔργα τοῦ διαβόλου,” δυνατόν τῇ εἰς τὴν ψυχὴν ἡμῶν ἐπιδημία τοῦ λόγου τοῦ θεοῦ, λυθέντων τῶν ἔργων “τοῦ διαβόλου,” ἐξαφανισθῆναι τὸ ἐντεθὲν ἡμῖν “σπέρμα” πονηρὸν, καὶ γενέσθαι ἡμᾶς “τέκνα τοῦ θεοῦ”.

(15) PE22, 2 (GCS 3, 347, 5-7): “τὸ” δὲ “πλήρωμα τοῦ χρόνου” ἐν τῇ τοῦ κυρίου ἡμῶν Ἰησοῦ Χριστοῦ ἐπιδημία ἐνεστίν, ὅτε τὴν υἰοθεσίαν ἀπολαμβάνουσιν οἱ βουλόμενοι,...” Cf. Rom 8, 15

(16) PE22, 2 (GCS 3, 347, 10-12): “ὁδοὶ δὲ ἔλαβον αὐτὸν, ἔδωκεν αὐτοῖς ἐξουσίαν τέκνα θεοῦ γενέσθαι, τοῖς πιστεύουσιν εἰς τὸ ὄνομα αὐτοῦ.”

(17) ComJn X X, 17, 138.

(18) ここに見られる、神によって与えられ、人間が自由にそれを用いる、という構造は、人間が神から言理を与えられ、それを良くも悪くも方向付けをして用いることができる、というところへも合致する。

(19) 魂は上下の二部構造としても理解され、ヘーゲモニコンのみが魂の上部に位置付けられている。ここが神の像の所在であり、人格の所在 n83 である。そしてこのヘーゲモニコンに含まれるのがロゴスとも呼ばれるヌース(分別、理性)、ディアノイア(観念)、ディアノエーティコン(悟性)、カルディア(心)の四つである。すなわち、この四つの部分は人間を導く能力を持ち、それは神の性質を帯びておりと同時に、人格を表すものであると言える。この部分において言理を内部に受け入れる。 Cf. W. Gessel, op.cit., pp. 138-139.

3.2. 言理の受け入れの可能性—なぜ悪い木が良い実を結べるのか

しかし、正しい行為が不可能である者にとって、自由意志によって言理を受け入れるという言わば正しい行為が、果たして可能であるのか。オリゲネスの言葉に厳密に従うと、ここで人間の側には何の行為も提示されていない。「魂のうちに神の言理が来られる」ということのみが、悪い種子の根絶の時とされている。

ここで、悪い種子を持ちながらも良いものを生じた、という、一見矛盾するように見える現実に関して、オリゲネスの展開している理解を考察したい。

「救われない人が悪い本性を有しているのであれば、その人が、善に至らないとはいえ、善を欲し、善に向かって走るということがどうしてありうるのだろうか。……どうして悪い木が良い実を結び得たのであろう」⁽²⁰⁾との論述に関しては先にも扱ったが、ここにおける「良い実」とは「善を欲する」ことを意味する。罪への方向性を有する人間にとって、善を欲することはできないはずである。善を欲することは、善への方向性ゆえのものだからである。この矛盾はどのように理解されているのか。

オリゲネスは、悪意を捨てるのは人間の能力によらず、神によるとの見解に反論する⁽²¹⁾。また、「神の言葉も自らに近づく人々から『石の心』を取り去ると約束している」と述べ、「神によって『石の心』を取り去られるのは、神に聞き従わない人々ではなく、神の教えている掟を受け入れる人々である」⁽²²⁾としている。ここに、掟を守るという主体的態度の必要性が説かれている。

前述の問いは、オリゲネスが自由意志について述べるさい、パウロの言葉を根拠に⁽²³⁾、神からの助力としてのあわれみが不可欠であることを説明しようとするために提示されたものである⁽²⁴⁾。彼は、その説明の方法として、悪い性質のものからよい性質のものが生じ得た事実について、その矛盾とも言える側面を考察の対象にして問いを投げかけた。

しかし、ここでは、この問いのなかで事実として例示されている前述の側面に注目したい。オリゲネスは、悪い木である人間が良い実である善を欲するということが、現実に生起している現象であることを前提としている。善を欲するということは善への方向性を有しているということであり、中間的なことではなく、明らかに善である。それはなぜ、あるいはいかにして可能であるのか。そこでは「救い」をめぐる議論が展開されており、以下の論述は重要である。

(20) PA III, 1, 18. 本稿、注13参照。

(21) PA III, 1, 15.

(22) Ibid.

(23) Rom 9, 16.

(24) PA III, 1, 18-19.

我々の良き意思、敏捷な意図、我々のうちに存在しうるあらゆる精励が神の援助に助けられ、強められないなら、救いを得るのは人間の意思だけでは不十分であり、天の「報い」を得、「イエス・キリストにおいて上に召して下さる神の栄冠」を得るには、死ぬべき人間の努力だけでは不十分である。……我々の完成も、我々が無為で怠惰にふけていても表現されるわけではないが、その仕上げは我々にではなく、その実現にあたって最も大きな働きをなされた神に帰すべきである。⁽²⁵⁾

つまり、人間は辛苦、努力、精励を尽くさねばならないが、しかしそれによって、結果として与えられる「実り」は神に依拠するのであり、その実りとは、神からのあわれみとして人間に与えられる「援助」を指す。この「援助」という実りは、人間自らに依拠しないところの結果であるがゆえに、人間が自らの力で導き出すことはできない。人間に依拠する事柄、すなわち、人間がその責任を有する事柄は、以下の内容に示されている。

使徒「パウロ」は悪を望むことが神によるとか、善を望むことが神によるとか言っているのではないし、善あるいは悪を行うのは神によると言っているのでもなく、ただ一般的に「志を立てさせ、事を行わせるのは神である」と言っているだけである。……意味は、手が動くこと自体が神によるということである。そこで、神によって与えられた動きを善に向けるか、悪に向けるかは我々によることである。……我々は意思の能力を神から受けているが、あるいは良い願望に、あるいは悪い願望に向かうように、この意思を用いるのは我々である。⁽²⁶⁾

我々の自由意志にかかっていることが、神の助けなしに成し遂げられると考えてはならないし、神のみ手の果たすことが、我々の行動、努力、意図を伴わないで成し遂げられるとも考えてはならない。⁽²⁷⁾

……理性的「被造物」の各々は、自分の意図と振舞に応じて、ある時には悪から善へと方向転換し、ある時には善から悪へと転落するものであると考えるのは、ずっと敬神の基準に似つかわしいことである。……ある者は、まず小さな過

(25) PA III, 1, 19 (Görgemanns-Karpp, 536, 1-12 [536, 17-32]) : οἴτως ἐπεὶ οὐκ ἀρκεῖ τὸ ἀνθρώπινον θέλειν πρὸς τὸ τυχεῖν τοῦ τέλους, οὐδὲ τὸ τῶν οἰονεὶ ἀθλητῶν τρέχειν πρὸς τὸ καταλαβεῖν τὸ βραβεῖον τῆς ἄνω κλήσεως τοῦ θεοῦ ἐν Χριστῷ Ἰησοῦ (θεοῦ γὰρ συμπαραισταμένου ταῦτα ἀνύεται), … οὕτω καὶ ἡ ἡμετέρα τελείωσις οὐχὶ μῆδὲν ἡμῶν πραξάντων γίνεται, οὐ μὴν ἀφ' ἡμῶν ἀπαρτίζεται, ἀλλὰ θεὸς τὸ πολὺ ταύτης ἐνεργεῖ.”

(26) PA III, 1, 20 (Görgemanns-Karpp, 540, 12-542, 8 [540, 25-542, 22]) : “καὶ πρὸς τοῦτο δὲ λεκτέον ὅτι ἡ τοῦ ἀποστόλου λέξις οὐ φησι τὸ θέλειν τὰ κακὰ ἐκ θεοῦ εἶναι ἢ τὸ θέλειν τὰ ἀγαθὰ ἐκ θεοῦ εἶναι, ὁμοίως τε τὸ ἐνεργεῖν τὰ κρείττονα καὶ τὰ χείρονα, ἀλλὰ τὸ καθόλου θέλειν καὶ τὸ καθόλου ἐνεργεῖν. … ἀλλὰ τὸ μὲν γενικόν, τὸ κινεῖσθαι, ἐλάβομεν ἀπὸ τοῦ θεοῦ, ἡμεῖς δὲ χρώμεθα τῷ κινεῖσθαι ἐπὶ τὰ χείρονα ἢ ἐπὶ τὰ βελτίονα οὕτως τὸ μὲν ἐνεργεῖν, ἢ ζῶα ἐσμεν, εἰλήφαμεν ἀπὸ τοῦ θεοῦ καὶ τὸ θέλειν ἐλάβομεν ἀπὸ τοῦ δημιουργοῦ, ἡμεῖς δὲ τῷ θέλειν ἢ ἐπὶ τοῖς καλλίστοις ἢ ἐπὶ τοῖς ἐναντίοις χρώμεθα, ὁμοίως καὶ τῷ ἐνεργεῖν.”

(27) PA III, 1, 24 (Görgemanns-Karpp, 558, 10-11 [558, 23-25]) : οὔτε τὸ ἐφ' ἡμῖν χωρὶς τῆς ἐπιστήμης τοῦ θεοῦ, οὔτε ἡ ἐπιστήμη τοῦ θεοῦ προκόπτει ἡμᾶς ἀναγκάζει, …”

オリゲネスの祈祷理解（梶原）

失から始めるが、ついに逆らう霊どもと同程度に悪質なものとなる程、悪意を膨張させ、悪のきわみに至るといえることが起こりうると思わねばならない。⁽²⁸⁾

つまり、ここにあるのは、それぞれに与えられた意志の能力への責任である。しかしそこには同時に、神の助けが不可欠である。それによって人間は魂のうちに言理を受け入れ、悪い種子は根絶するとともに、人間は神の子となる。

また、人間が神の子であるのか悪魔の子であるのか、その見極めについて、オリゲネスは「わたしたちは実から、どちらの子であるか認められるのです」⁽²⁹⁾と述べている。つまり、人間が善を欲するか否かによって、あるいはその結果としての行動によって、その人が神の子であるのか悪魔の子であるのかが判別され得るものと考えられている。

3.3. 良い実を結ぶ実際的過程—迫害する者のための祈りによって

しかし、実際いかにして悪い木が良い実を結び得ると考えられていたのか。そのために、人間は何をすればよいのか。

前述の論述から、「かつて悪魔の子 [であった者] も神の子となることができる」⁽³⁰⁾というのは、良い実を結ぶ、つまり、善を欲する者となることを指すと言える。オリゲネスはその過程を、福音書に見出している。

ある人は構成のゆえに…… (中略) ……かつて悪魔の子 [であった者] も神の子となることができます。救い主が語られた次の言葉を書き記して、マタイもこのことを明らかにしています。「隣人を愛し、敵を憎め」と命じられたのを、あなたたちは聞いている。しかしわたしはあなたたちに言う。あなたたちの敵を愛し、あなたたちを迫害する者のために祈りなさい。こうして、あなたたちが天におられるあなたたちの父の子らとなるためです。⁽³¹⁾

(28) PA III, 1, 23 (Görgemanns-Karpp, 556, 3-7 [556, 3-14] : ὥστε κατὰ τοῦτο διὰ τὰς προαιρέσεις τινὰς μὲν ἐκ χειρόνων εἰς κρείττονα προκόπτειν, ἑτέρουσ δὲ ἀπὸ κρείττωνων εἰς χείρονα καταπίπτειν, καὶ ἄλλουσ ἐν τοῖσ καλοῖσ τηρεῖσθαι ἢ ἀπὸ καλῶν εἰς κρείττονα ἐπαναβαίνειν, ἄλλουσ τε αὐ τοῖσ κακοῖσ παραμένειν ἢ ἀπὸ κακῶν, χρομένησ τῆσ κακίασ, χείρονασ γίνεσθαι. [Unde et arbitrandum est possibile esse aliquos, qui primo quidem a parvis peccatis coeperint, in tantam malitiam diffundi et in tantum malorum venire profectum, ut nequitiae modo etiam adversarii potestatibus exaequantur].”

(29) ComJn X X, 13, 105. Cf. Mt 7, 16. オリゲネスはこの同じ譬え話に属する Mt 7, 18を、論敵の論拠として例示している。後者においては、悪い本性を有する、つまり論敵たちの主張する、救われないと決定されている人も、善を欲することがあり得るのであり、その悪から善への変化に「神のあわれみ」の存在と働きを顧慮して述べているものと思われる。Cf. PA III, 1, 19.

(30) ComJn X X, 13, 106.

(31) ComJn X X, 13, 106 : ἐπιγνωσκόμενοι τίνουσ ἐσμὲν υἱοί. καὶ ἐκ τούτων μέντοι γε δῆλόν ἐστιν ὅτι οὐ διὰ κατασκευὴν υἱὸσ τίσ ἐστιν διαβόλου, οὐδὲ διὰ τὸ οὕτωσ δεδημιουργῆσθαι υἱὸσ τίσ ἐν ἀνθρώποισ λέγεται τοῦ θεοῦ· καὶ δῆλον ὅτι δύναται ὁ ποτε νεὸσ τοῦ διαβόλου γενέσθαι υἱὸσ τοῦ θεοῦ, ὅπερ σαφὲσ καὶ ὁ Ματθαῖοσ ποιεῖ ἀναγράφων τὸν σωτήρα οὕτωσ εἰρηκέναι· Ἐκούσατε ὅτι ἐρρέθη· Ἀγαπήσεισ τὸν πλησίον (σου καὶ μισήσεισ τὸν ἐχθρόν σου· ἐγὼ δὲ λέγω ὑμῖν, ἀγαπήσατε τούσ ἐχθροῦσ ὑμῶν καὶ προσεύχεσθε ὑπὲρ τῶν διωκόντων ὑμάσ· ὅπωσ γένησθε υἱοί τοῦ πατρός ὑμῶν τοῦ ἐν τοῖσ οὐρανοῖσ)

祈ってください。「敵を愛しなさい。そして迫害する者らのために祈りなさい」という言葉から、かつて天におられる御父の〔子では〕なかった者も、後に〔御父〕の子となるからです。⁽³²⁾

人が天におられる神の子となるのは、自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈ることによるほかにないとすれば、次のことは明らかです。即ち、だれ一人として、本性によって神からのものであることゆえに、神の言葉を聞くのではなく、神の子となる資格を受けたこと、及びふさわしくその資格を用いること、更に敵を愛し、迫害するもののために祈ることによって天におられる御父の子となった人が〔神の言葉を聞くのです。〕⁽³³⁾

ここでオリゲネスは、神の子となるためにイエスによって求められていることを根拠に、迫害する者のために「祈る」ことを奨励している。ここに、悪魔の子が神の子となる可能性が開かれている。オリゲネスはこの言葉の引用の根拠を、その祈りを奨励するときのみ「天の父の子となる」と言われているからであると述べている。神の子になるには、敵を愛し、迫害する者のために祈ることによる。人間は、神の子になるという資格を持つ結果、その資格を用いて神の言葉を聞く。

4. 罪人である人間への警告

人間が罪人であるとき、行いに関して、以下のような見解が見られる。

……罪人は皆、悪のこの代に縛られているからです。……「わたしたちの死ぬべき体を罪に支配させ、その欲望に屈服してはなりません。」⁽³⁴⁾

……「肉の業」や神とは相容れないことにわたしたちの魂を煽り立てる、その指令に従ってはなりません。⁽³⁵⁾

この叙述の前提として、人間が罪に支配されることによって欲望に囚われることや、強迫的な指令が存在すると理解されていることが明らかである。だからこそ、それらに対しては、指令に「屈服」したり「従ったり」することは適切ではないものとして、警告が与えられている。それには、人間が自らが選択することが必要である。

(32) ComJn X X, 13, 107.

(33) ComJn X X, 33, 292 : και ει ουκ άλλως γίνεται τις υιός του έν ούρανοίς πατρός ή έκ του αγαπάν τους έχθρους έαυτού και προσεύχεσθαι υπέρ των διωκόντων αυτόν, δηλον ότι ουδεις τῷ φύσει είναι έκ του θεού τὰ ρήματα του θεού άκούει, αλλά τῷ λαβειν έξουσίαν τέκνον θεού γενέσθαι και κεχηρησθαι εις δέον τῆ έξουσία, και τῷ ήγαπηκέναι τους έχθρους και προσεύχεσθαι υπέρ των επηρεαζόντων γενόμενος υιός του έν ούρανοίς πατρός.

(34) PE 25, 1 (GCS 3, 357, 13-24) : “παντός <δὲ> άμαρτωλού κατατυραννουμένου υπό του άρχοντος του αιώνος τούτου, “έπει πάς άμαρτωλός τῷ ένεστώτι αιώνι πονηρῷ. …μη ούν βασιλευέτω ή άμαρτία έν τῷ θνητῷ ήμών σώματι εις τὸ υπακούειν ταις επιθυίαις αυτής.”

(35) PE 25, 3 (GCS 3, 358, 30-359, 1) : “μηδὲ υπακούωμεν τοίς προστάγμασιν αυτής, επί τα έργα της σαρκός” και τὰ άλλότρια. του θεού προκαλουμένης ήμών την ψυχήνρ.”

オリゲネスの祈禱理解 (梶原)

つまりそれは、自由意志による。オリゲネスは次のようにも述べている。

ご自分の父の意思を行い、それを完全に成し遂げるために来られた、キリストが行われたように、御父の意思を行うことができるように、教会に属する人々は各々祈らねばなりません。⁽³⁶⁾

つまり、そこに祈りが必要とされている。それは、御父の意思を行うことができるようにとの祈りである。自由意志が自由であるためには、意志が、人間の罪から生じる欲望や衝動から解放されることが必要である。この解放は人間の努力のみによるのではなく、神の力を必要とする。

5. 人間の自由意志と、御子、聖霊との共働―「知る」こと

オリゲネスにおける自由意志に関しては、拙論においてすでに述べた⁽³⁷⁾。そこにおいては、人間は存在する主体としての在り方が問われ、罪を負い、弱い存在でありながらも、与えられている能力のゆえに、決して責任から逃れられないというオリゲネスの考えを確認すると同時に、だからこそロゴスとしてのキリストの存在が意味を持ち、彼において神の意思を教えられることによって、逆に、われわれが意志するもの、選択するものを示され、そこに意味を与えるという点を提示した。

かつてギリシャ哲学で、隔絶した神と人間との関係に接点をもたらしものとしてロゴス概念が用いられたが、オリゲネスにおいては完全な「神の像」を内包するキリストが唯一のロゴスである。この、キリストをロゴスとする考えには、不完全な人間が完全な神とは決して合一し得ないという断絶された関係を超越し、新たな道が示唆される⁽³⁸⁾。人間は優れた能力をもってしても独力では神を知り得ない。しかし、キリストによるグノーシスを得ることによって、それが可能ならしめられる。神への知、グノーシスは、この世の知識と矛盾し、対立する。ゆえに、そこにしか得られないのである。それをキリストは提示する。

人間の意志は、自らにとって最も自然であるところのものを願い求めることによって力を得、意志するところのものとなる。本来の自らを知ることによって、キリストの提示されるものと自らの求めるものは調和へと向かう。自らの真の必要を知るから

(36) PE 26, 3 (GCS 3, 360, 26-361, 1) : “εὐχερῶς λύσει τὰ ζητούμενα, λέγων εὐχεσθαι δεῖν ἕκαστον τῶν ἀπὸ τῆς ἐκκλησίας οὕτω χωρήσαι τὸ πατρικὸν θέλημα, ὃν τρόπον Χριστὸς κεχώρηκεν, ὁ ἐλθὼν ποιῆσαι τὸ θέλημα αὐτοῦ τοῦ πατρὸς καὶ πᾶν αὐτὸ τελειώσασθαι”

(37) 拙論「オリゲネスの『意志』理解に関する一考察」『大阪女学院短期大学紀要』第32号、2003年、53-64頁。

(38) これに関連する事柄として、オズボーンが、仲介者イエスに関するオリゲネスの理解について、仲介者は人間に対して神とのあいだのギャップを「取り除く」のではなく「埋める」ものと述べていることは、適切な表現であろう。

Cf. Osborn, E., “The Intermediate World in Origen’s On Prayer”, in: *Origeniana Secunda Second colloque international des études origéniennes*, Roma, 1980, pp. 95-103.

である。

ここにはまた、聖霊も参与する。聖霊も神と同様、人間とは完全に隔絶された存在であり、人間は本来、聖霊との接点を全く持つことができない。しかし、オリゲネスは人間を祈りに導く第一歩として聖霊をとらえている。その聖霊の参与は「聖なる人」との呼びかけで表されている人のみならず、すべての人間に対して開かれていると考えられていることを、拙論の結論において提示した⁽³⁹⁾。

オリゲネスは「何を願ってふさわしく禱るべきかをわたしたちは知らない」とのパウロの言葉を、二度にわたって引用している⁽⁴⁰⁾。この場合、それを補うのは聖霊による執り成しであると理解されている。この霊は、讚美においても精神をリードする。祈るためにも、祈りについて論じるためにも、聖霊が不可欠であることをオリゲネスは強調する。聖霊は人間を、「知らない」ことによる事柄との断絶から解放する。

さらに、人間が聖霊に与るとき、「名状し難い神秘を知ることによって、疑いもなく、心の慰めと喜びを受け」、「霊に教えられて知るので、いかなることによってもその魂が動揺することはあり得ず、悲しみを感ずることもあり得ない。」⁽⁴¹⁾

オリゲネスは「ある人が神を知らないとすれば、その人は神に属するものをも知らず、自分が何を必要としているのかも知らないのです。彼が必要としていると考えているものは誤ったものだからです。」⁽⁴²⁾と述べている。何らかの必要性を自分自身に認識することによって、人には欲求が生じる。そしてしばしば、それは誤った対象に向けられる。オリゲネスによれば、たとえばそれは「名誉への愛着」である。彼はそれを「破壊をもたらす情念」⁽⁴³⁾にほかならないと警告している。聖霊は、そのような欲求を満たすことによらず、人間に慰めと喜びを与える。

祈りにおいて、神に直接向き合うことは、神を認識し、自分を認識する過程である。その過程を経るなかで不必要な対象の希求は、聖霊によってその不必要性の自覚とともに消滅へと導かれる。

オリゲネスはこの事柄を、異教徒および偽る者の祈りが、なぜ同じような方法によっても祈りの肯定的な効果が期待できないのか、ということへの最後の説明として取り上げていた。両者の違いは、自らへの知の有無に起因する。

(39) 拙論「オリゲネスの祈りにおける聖霊の参与—『聖なる者』にのみ限定される意味について—」『神学研究』(関西学院大学神学研究会) 第46号、1999年、1-22頁。

(40) PE 2, 1; 2, 3.

(41) PA II, 7, 4 (Görgemanns-Karpp, 378, 14-18): "cognitis ineffabilibus sacramentis consolationem sine dubio et laetitiam cordis assumit...spiritu indicante cognoverit, in nullo utique conturbari eius anima poterit aut ullum sensum maeroris accipere;"

(42) PE 21, 2 (GCS 3, 346, 5-7): "εἰ δὲ τις ἀγνοεῖ τὸν θεὸν, καὶ τὰ τοῦ θεοῦ ἀγνοεῖ, ἀγνοεῖ δὲ τὰ ὧν χρεῖαν ἔχει· διημαρτημένα γὰρ ἔστι τὰ ὧν χρεῖαν ἔχειν νομίζει."

(43) PE 19, 2 (GCS 3, 341, 28): "ὀλέθριον πάθος".

結

これまでに述べてきたことをふりかえって、結論を提示したい。

オリゲネスは人間の性質の根本に罪性を据えている。この罪によって、人間は善を欲することも志向することもできない。にも拘らず、その閉じられた罪の循環から解放されるのは、祈る行為のなかにおいてである。また、そのさいの、魂へのロゴスの到来による。この到来を魂が自らのうちに招き入れるには、神の助力が必要である。同時に、主体的に迫害者のために祈ることの必要性が説かれる。なぜなら、聖書に拠れば、そのときに「父の子」となるからである。

人間は、ロゴスによって、この世の知と矛盾する神の知を知らされ、また、聖霊によって、実践すべき具体的事項を教えられる。その知が、意志を導く。そしてその意志は、神からの離反へと誘う自らの欲求の犠牲になることなく、むしろその欲求を解放させる方法を得る。そして、そのさいの痛みを主体として負う方法を学ぶ。

これらのすべての過程において、人間は自らに責任を負う。そこには同時に神の力が不可欠である。ゆえに祈ることが必要である。なぜなら、祈るなかで、これらの過程は進行するからである。その過程を選び、意志をもって入るのは人間であるが、そこにおいて人間に自らを知らせ、変化を与えるのは神である。そして、聖霊の助けにより、イエスを仲介者として、父なる神に向かって祈る。この祈る行為こそが、神を知らせるのである。

罪性を有する人間が、途絶えることのない神からの離反に直面しながらも神の子となり、そこに留まることを可能にするのは、ロゴスであるキリスト・イエスと聖霊により、神と自己への無知から自由になることによってである。そのとき、人間をある限定に閉じ込めてきた価値観や知識はもはや力を失う。誰よりオリゲネス自身がそれをすでに経験し、知っていた。この知は、外在する客観的な知的事柄としてではなく、自らの体験により、自らのものとして獲得される。その体験とは、祈りを指す。

祈りに根ざしたオリゲネスの生き方に窺える禁欲的な側面も、それが、ある一定の価値観にとどまるべく努力することによってではなく、自由な意志によって選ばれたものであろうことは、彼のその態度がこの知に基づくものであったと仮定するとき、理解することができる。